

## おわりに 「矛盾」の本当の意味

番組冒頭のアナウンスにもどろう。

*われわれは、現代の日本で、さまざまな矛盾を見つけた。*

番組はここから始まる。一見相容れない2つの主張を実際に戦わせてみたらどうなるか なるほどそれは、魅力的なアイデアだ。『ほこ×たて』は、このインスピレーションから「誰も見たことのない」番組に育った。しかし、その「魅力」に目を奪われて、<矛盾>という言葉の本来の意味は次第に見失われていった。実は、それこそが最大のリスクだった。

つまり<矛盾>的な状況を設定すること自体が、「つじつまが合わない」、論理的には成立しない「無理」が生じる危険を、本質的にはらんでいるのだ。本件事案を、準備段階から追ってみると、いたるところでそのリスクを看過した、ずさんで読みの甘い判断が下され、積み重なって、その結果決して譲ってはいけない「一線」すらも、踏み外すに至ったことがわかる。

誤解しないでほしい。決して「<矛盾>を設定しようとしたことがそもそも過ちだった」と言いたいわけではない。そこにあえてチャレンジした“制作者魂”はずばらしいし、だからこそ番組は成功した。ただ残念なことに「このチャレンジの難しさ」に関する認識が甘かったのではないか。

委員会では、なぜ「MAXパフォーマンスタイム」を簡単に切ってしまうのかという疑問の声があがった。そこにこの番組を成り立たせている「約束」「二重の了解」の核心があることになぜ考えが及ばなかったのだろう、と。目先の成果に振り回され、愚直に番組の本質を追求することを止めたとき、<矛盾>をギリギリで「無理」から救っていた歯止めは失われてしまった。

繰り返して言う。かつて委員会は、バラエティーは「危ういバランスの上に乗っている」と書いた。だからこそ、覚悟と十分な策略を有した「確信犯」であってほしいと願った。その大胆な試みを実現し、継続させるためには、情熱やひらめきの一方で、冷静に自己を見つめ、仲間と丁寧に話し合い、相互に承認しあう手続きが必要なのだ。確かにバラエティー番組の価値は、緊張を解いて「楽しむ」ことにあるが、それは、制作者も一緒になって「楽しむ」だけでは成立しない。むしろ制作者は、出演者や視聴者が心置きなく楽しめる状況をつくるために、高い緊張感をもって臨む必要がある。

バラエティーは、テレビという文化が創り上げた、最もテレビらしいジャンルである。そこで「誰も見たことのない番組」をつくり続けるのは、簡単ではない。バラエティーを成り立たせる「約束ごと」は、実にもろく、ちょっとしたことでひびが入っ

てしまう。それが続けば、このジャンルが支えるテレビそのものへの信頼が崩れかねない。

委員会は、この意見書をきっかけに、多くのバラエティー制作者と、バラエティーの社会的意義とは何か、番組制作において大切にすべきこととは何かを、今一度確認しあいたいと考えた。そしてその姿勢を多くの視聴者にも示し、もう一度心置きなく番組を楽しめる環境を取り戻したい、と。

それはやりがいがある仕事だ。関係スタッフには、ぜひ頑張ってもらいたいと思う。一度失った評価を取り戻すのは、厳しい道だろう。けれど『ほこ×たて』は確かに輝いている番組だったのだ。初心に戻って、大胆かつ慎重に、新しい「誰も見たことのない番組」に挑んで欲しいと、心から願っている。